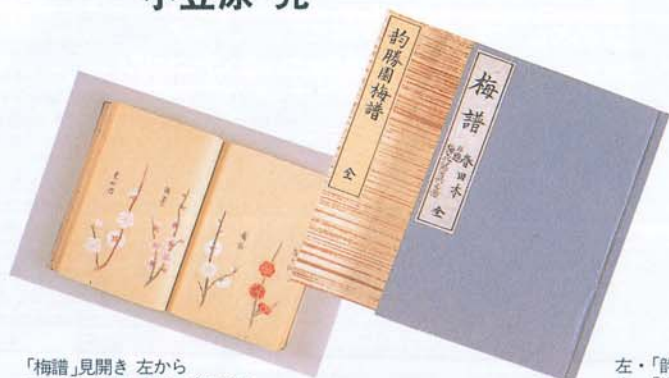


江戸時代の 花たち

3

書物に見る
江戸時代の園芸文化

小笠原 亮



「梅譜」見開き 左から
東牡丹/雛疊/鶯宿/猩々紅

左・「韵勝園梅譜」写本
右・「梅譜(内題)梅花寫真之図」写本

梅譜

内題/梅花寫真之図

雑花園文庫蔵



「梅譜」見開き 左から漢陽亭/千里/蝶の羽重/初日野

ウメは古来花魁、花兄などと呼ばれ、文人墨客に親しまれ觀賞されてきた。今回紹介する『梅譜』は、冒始82翁なる人の求めに応じて春田久啓により写本され、藤原義行、成島司直の自筆序文が巻頭にあり、年代は文政6(1823)年の成立である。内容は、1頁に2種2図が丁寧な彩色図でかかっている。総数は105種、現在も同名の品種が存在する代表的なものを拾ってみると、茶青、雪燈籠、雛鶴、輪達、小梅、江南所無紋隠、五色、海棠、初雁、月宮殿、武蔵野、谷雪、八重西王、関守、鶯鶯、千鳥、未開紅、白牡丹、鶯宿などが並ぶ。

さて『日本博物学史』(上野益三著)によれば文化9(1812)年の項に、「春田久啓撰『韵勝園梅譜』1帖なるウメの品種96の彩色図譜(中略)春田久啓、幕臣、西丸詰、通称四郎五郎、梅の培養家として知名」とあり、あまり身分は高いほうではなかったようで、前書の義行の序文中「(前略)春田の久啓これを愛し名だたる花を集めつちかい、或いは枝をつぎ實をまきておふくたつき事とあり(後略)」と書かれ、幕臣ながらウメの育種とともに苗生産を行い収入を得ていたものと考えられる。『韵勝園梅譜』は、国会図書館蔵。伊藤文庫本には図がなく、解説文のみで100種が記載され品種数の異なる伝本によって異なるものほうが少なく、当時の品種数の多さを知るとともに時間をかけて十分な調査を行いたい。